

「稲むらの火」という教材が、もしその時に使われていたら、この惨事はなかったろうに、という声がありました。

災害に対しては、正しい伝承や実話による日常の教育が大事です。その10年後に北海道奥尻島が大津波に見舞われますが、日本海中部地震が教訓となって、かなりの住民が地震のあとすぐ避難しました。しかし、このとき札幌管区気象台が津波警報を発表したのは地震から5分後で、津波は地震から4、5分後に襲来したので、青苗五区をはじめとして約200人の死者を出しました。この警報も当時の技術としては精一杯で、今は地震から約3分で出せるようになっていきます。

戦争中の情報統制下では、地震学や防災学が大変遅れました。典型が1944年の東南海地震で、南海トラフに沿った3つの震源域の真ん中が動いたのです。名古屋の港湾沿いの航空機工場では、勤労員の中学生が多数亡くなりました。完成した飛行機を外に出しやすしよう工場で壁がなく、震度6の揺れで一挙に倒壊したのです。熊野灘沿岸を襲った大津波は尾鷲



津波に流されて公民館の上に打ち上げられた観光バス(宮城県石巻市)

止場も大震災をしっかりと後世に伝えていきますから。

教訓を生かし正しく恐れよ

関西には地震はこないといわれていたのですが、活断層は圧倒的に中部や近畿に多く、震源の浅いマグニチュード7クラスの地震による激甚な揺れが、専門家の間では予想されていました。私は神戸の消防局の雑誌『雪』に、六甲断層は歴史時代に動いていないから今に動きますよと、警告していました。宮城県沖地震については政府の地震調査委員会が過去の歴史から平均発生間隔37・1年とし、1978年から33年で発生確率が高いといっていました。中央防災会議は千島海溝・日本海溝・そして周辺の海溝型地震への防災対策推進を決めていたのですが、今回宮城県沖も含めて全部一緒に起こっ

で8m以上だったのですが、大災害だったにもかかわらず、国民に伝えられず、現場で写真を撮っていた地震学者が憲兵に咎められるなど、調査も十分にできませんでした。しかし海溝型巨大地震ですから、地震波は地球をまわります。だからアメリカはちゃんと知っていて、ワシントンポストやニューヨークタイムズでは報じられています。情報の統制によって、調査研究が遅れただけでなく教育も不十分になりました。

震災の現場から学ぶこと

東日本大震災の現場では街が全部なくなつて鉄筋のビルがポツンポツンと残っている、つまり社会の喪失です。驚いたのはビルの3階から4階を津波が突き抜けていて、『鉄筋のビル3階以上を避難場所』というのを修正しなくてはなりません。宮古市田老地区の高さ10mの2重の防潮堤も一部が破壊され、世界一と安心していて逃げ遅れた方もありましたが、防潮堤があつたために、津波の力はかなり弱められたと思います。「津波でんでんこ」。周りにかま



無惨に破壊された、高さ10m、延長2.4kmを誇る日本一の防潮堤(岩手県宮古市田老地区)

わず高みに逃げろという三陸の言い伝えですが、家族や高齢者を気遣って命を落とされた方も多かったことでしょう。また、震災後の被災者の秩序ある行動や若い世代の活動も目覚ましく、失われていなかった日本人の資質に誇りが甦ったのではないのでしょうか。空前の悲劇ですが得られたものも多いと考えています。

私たちのいまの議論は被災者のお気持ちもありますが震災の遺構をどう残していくかです。釜石の民宿の上の観光船は結局撤去されましたが、私は石巻市雄勝町の公民館の上に乗った観光バス、これは残せるのではと訴えています。災害の記憶を風化させないで伝えることは非常に大事です。淡路島の地震断層や神戸のメリケン波

たのではないかと考えられ、これは地震学の限界を示すものでした。1962年の地震学者の報告書「ブループリント」があります。その頃は地震予知に明るい見通しがあつて、前兆に何が起きるか研究されましたが、結果として予知を役立つ情報とするのは難しい。しかし東海地震だけはなんとか予知しようとして震源域を囲んで密度の高い観測網を設置、1978年の大規模地震対策特別措置法で予知観測の整備と防災対策強化地域の指定が行われ、テレメータで送られたデータを気象庁が24時間監視しています。ある基準を越える異常が発生すると直ちに判定会が招集され、東海地震の前兆なら総理大臣が閣議を開き、2、3日前に警戒宣言を発表することになってい

ます。しかし、東海地震以外の地震については、予知できる体制になっていません。起きるときは不意打ちです。だから普段から防災対策を整えるほかないのです。

いま下図のような東海・東南海・南海の三連動地震が現実味を帯び

図：三連動地震の想定震源域



てきています。なかでも東海地震が切迫しているのはなぜか、実は1944年に東南海地震、2年後の1946年に南海地震が起き、東海だけが残っています。つまり東海は1854年から150年以上もエネルギーを貯め続けているのです。今後10年ほどの間に起きなければ3つ同時になるのではないかと、確率の高いのは2030年代で、富士山が大噴火する49日前にこの3つが一度に動いた日本列島最大の地震、1707年の宝永大地震と同じ規模になると予想されています。

去年9月1日、国ははじめて三連動地震を想定した総合防災訓練を実施しました。震源は南北500kmを超え、断層の破壊は今回よりさらに大きいと考えられます。地震は恐ろしいのですが、正しく恐れよ」というのが気

象庁長官を19年も勤められた和達清夫先生の言葉です。日本は地震大国ですから、冷静に今回得られた教訓を将来に向けて生かさなければいけません。



※ 小泉八雲の「A Living God」をもとに、中井常蔵の翻訳・再構成により教科書用に作られた。地震後の津波への警戒と早期避難の重要性、人命のための犠牲的精神の発揮を説いた名作。地震の題材となったのは1854年に起きた安政の大震災。